様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年　5 月 30 日現在

機関番号：14301
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2010～2012
課題番号：22520306
研究課題名（和文）　ベンボ『俗語論』とイタリア文学語の形成

研究課題名（英文）　Bembo’s *Prose della volgar lingua* and the establishment of the Italian literary language

研究代表者
天野　惠　（AMANO　KEI）
京都大学・文学研究科・教授
研究者番号：90175927

研究成果の概要(和文)：ベンボ『俗語論』第三巻の草稿 Vaticano Latino 3210 から初版(Tacuino, 1525)、第二版(Marcolini, 1538)、そして決定版たる第三版(Torrentino, 1549)について、その推敲および刊行後の異同をフォントの色分けにより示したテキストを作成した上で、記述内容の正確な和訳を行ない、いわゆる Fascicolo B の分析と併せて、《規範》意識の顕在化とその後の強化の様子を跡付けた。

研究成果の概要（英文）：Prepared the text of Pietro Bembo’s *Prose III* and its Japanese translation, with every minimal differences between the manuscript Vaticano Latino 3210, the princeps by Tacuino (1525), the 2nd edition by Marcolini (1538) and the last and definitive by Torrentino (1549), highlighted by variety font colors, I traced the birth and the development of Bembo’s deliberation to give his “norm” to the Italian literary language, in some cases even against the writing customs of his major authority of 14th century tuscan language, ie. Petrarch himself.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2011 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2012 年度	600,000	180,000	780,000
総　計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学（英文学を除く）
キーワード：イタリア文学・ベンボ・ルネサンス・言語問題・『俗語論』

１．研究開始当初の背景

アリオストの代表作『オルランド・フリオーソ』(以下、単に『フリオーソ』) には 1516 年の初版、1521 年の第二版、そして 1532 年の最終版という三つのエディションがあり、このうち最後の 1532 年版（通称 C 版）においては、新たな四本のエピソードが付加されて全体としての規模が 40 歌から 46 歌へと拡大されると同時に、言語面においても全面的な改訂が行なわれたことが知られている。筆者は四本の付加エピソードの創作年代および挿入に至る経緯に関してひととおりの研究を完成させた後、アリオスト文学の核心たる言語面に関心の中心を移し、この面における上記の三つのエディションの相互比較とともに、四本の付加エピソードについてのみ現存するアリオストの自筆ノート、いわゆる Frammenti autografi の分析を通じて詩人の創作過程における推敲のプロセスにメスを入れたいとかねてより望んでいた。

その最初の突破口は《前置詞 in＋定冠詞》

の扱いに関する問題であった。イタリア語においては、名詞に前置詞が付加される際、無冠詞になる傾向が強いが、これはラテン語に冠詞が存在しないという言語史的事情を考えれば当然の現象であり、こうした経緯からすれば、最終的に《前置詞 in＋定冠詞》が例外なく結合形を形作るようになる以前、両者が分離したままの形が併用されたとしても何らおかしくはない。実際、アリオストは1521年の『フリオーソ』第二版までこのようなアルカイックな形を多用していた。ところが、最終版に至ってこれが一掃され、結合形のみとなる。韻文の場合、これは通常、少なくとも該当するversoそのものの書き直しが要求されることを意味しており、場合によってはその前後のversoも影響を受ける。要するに詩人はかなり面倒な改変作業を余儀なくされるのである。

アリオストにこうした作業を強いたのがベンボの『俗語論』であったことは明らかである。そこには（第三巻 58 章）こうしたケースにおいて必ず結合形を用いるべきである旨、ペトラルカの権威を借りつつ主張されていた。ただし、アリオストの知っていた『俗語論』とは言うまでもなく 1525 年の初版（Tacuino版）を意味しており、続く38年のMarcolini版や、さらに後の決定版たる49年のTorrentino版は、1533年に他界するアリオストがこれを手にしたはずもなく、当然『フリオーソ』の1532年版とも関係はない。興味深いのは、『俗語論』の問題の部分が版を追って長くなっていく点である。説明は段々と詳しくなると同時に、前置詞 in と定冠詞が分離したままの表現を忌避すべしという主張はますます強硬なものとなっていく。とりわけ注目に値するのはペトラルカからの引用例である。

すなわち、『カンツォニエーレ』227番および336番において、実はペトラルカが前置詞 in と定冠詞の分離した形態用いているのであるが、それにもかかわらず、ベンボはMarcolini版およびTorrentino版『俗語論』において、こうした lectio を誤りと断じた上、彼の言うところの“正しい”読みを提示しているのである。

Torrentino 版はベンボの没後にベネデット・ヴァルキの監修を経て出版されており、従って必ずしもベンボ自身の遺志を反映していないのではないかと疑われる部分を含むものであるが、この問題の部分に関しては、『カンツォニエーレ』227番および336番を引いてその lectio を“正す”叙述がすでにMarcolini 版に見られることから、基本的には著者の遺志もこのようなものであったと考えられる。すなわち、仮にベンボは 49 年版ではこれを削除しようと考えていて、それにもかかわらずヴァルキがそのまま出版したのだ、といった類の複雑な仮説を立てない限りは、これがベンボの最終的な意図に沿った論述だと考えるべきであり、それに反する可能性を云々するに足る根拠は、すくなくとも現時点では発見されていない。

そんなわけでベンボは最後まで Marcolini 版で唱えた lectio を正しい読みであるとする主張を維持したと思われるのであるが、ここで問題になるのは、1544年に彼がペトラルカのオートグラフ Vaticano Latino 3195 を入手していたという事実である。つまり、彼は自分の主張する“正しい”読みなるものが実は誤りであることを明確に認識していたことになる。ペトラルカの作品に勝手な改竄を施してまで、彼は《前置詞 in＋定冠詞》には必ず結合形を用いるべきであることを強調したかったのである。言うまでもなく、これは「権威」たるべきペトラルカに、自らの主張する《規範》を優先させたことを意味しており、文献学者ベンボから規範制定者ベンボへの決定的なシフトを表わすものに他ならない。

若き日のベンボは、1501年、アルドゥス・マヌツィウスのためにペトラルカ作品の校訂を行なっており、ここでは問題の箇所において分離形態（すなわち、正しい lectio）を採用していた。そして、アリオストは同時代の詩人のみならずダンテやペトラルカ等 14 世紀の詩人たちに比較しても、分離形態を採る頻度がかなり高く、16年の初版『フリオーソ』にあっては実に半分近いケースで分離形態を用いていた。

筆者の関心は、まずもってベンボによるアルドゥス版『カンツォニエーレ』の校訂に代表される「俗語文献学」と、アリオストの第三版『フリオーソ』における改変作業に見られるようないわゆる《ベンボ規範》の実作品に対する影響力との関係に寄せられた。とりわけ韻文に代表される文学作品にあっては、結合形と分離形態の選択が可能であれば自由度が増すことから、単に詩作における自由度に関わるのみならず、個々の詩人の美意識にも関連する問題であるだけに、いわゆる言語問題 Questione della lingua が一応落着した後に《規範》がどのようプロセスを経て実作品に受け入れられていったのかを観察することが、文学史研究にとって一定の意味を持つように思われたのである。とりわけ文学史上、影響力の大きかった作品においてその受容の過程を追跡することは重要であるように思われた。

そして、そのような観察に適した資料として、Frammenti autografi を含む、『フリオーソ』の三つのエディションを挙げることができる。アリオストは同時代の詩人の中でも際立って分離形態を好む傾向が強いこと、および『俗語論』のやはり三つのエディションの

出版年代や、特に第三巻の推定執筆年代には、『フリオーソ』のそれらと重なり合う部分が多いからである。いずれ将来は 16 世紀中葉から後半にかけてのイタリア詩にも目を配る必要が生じるとしても、まずはこの素材の分析から取りかかるのが妥当である判断された。

本研究を開始する段階での状況は以上のようなものであった。

２．研究の目的

ピエトロ・ベンボの『俗語論』*Prose della volgar lingua* の成立過程を明らかにすることが本研究の目的である。これに続いては『フリオーソ』の三つのエディション、そしてとりわけ Frammenti autografi に残された推敲の跡をたどりつつ、いわゆる《ベンボ規範》の受容のプロセスを明らかにする作業を行ない、さらには同時代の他の主要作品に関しても同様の研究を行なうことが次の目標となるが、当面は《ベンボ規範》の成立過程を、その全行程にわたり可能な範囲で微視的に追跡することを目指した。

ヒューマニズムの時代とされる 15 世紀のイタリアにおいては、文人・知識人の関心が古典語に集中しており、俗語文学の創作・研究は一部を除くと必ずしも盛んではなかった。しかし、16 世紀に入ると、活版印刷術の普及による書物の大量生産・大量消費の時代が到来し、ダンテ、ペトラルカ、ボッカッチョ等の古典的俗語作品の出版や新たな作品の創作が急激な伸長を見せる。いわゆる「言語問題」が盛んに議論されるのもこの時代であり、その背景には当時の政治的・軍事的危機意識も働いていた。すなわち、未だ都市国家の世界であったイタリア半島が外国軍の介入によって戦乱の時代に突入し、時代の流れを高所から眺める視点を持ち得た階級にあっては、外国支配を免れる唯一の道が国家統一であることが実感される一方、半島内の現実の政治情勢はその実現が絶望的であることを明瞭に示していた。そこで少なくとも文化面における言語統一だけでも確保しておく必要性が痛感されていたのである。こうした状況下、俗語文学の中心は今や必ずしもフィレンツェのみではなく、主要作品の多くがナポリから北イタリアに至る広い地域で、非トスカナ人の手によって産み出されるようになっていた。その一方、イタリア文学の伝統は 14 世紀以来の古典的トスカナ語諸作品によって確立されており、別の方言あるいは多かれ少なかれ抽象的な議論に過ぎない人工性の高い新言語などが主流となる可能性は考えられなかったことから、必然的に文学用トスカナ語をめぐる様々な実際上の問題が、当時の文人・知識人は言うまでもなく、出版に関わりを持つすべての人間にとって避けては通れないものとなったのである。

1525 年、それまでの長きにわたる議論を踏まえて、文化的にも政治的にも著者の持つ大きな権威とともに登場したのがベンボの『俗語論』であった。「言語問題」の全般的な推移を俯瞰した場合、この著作の刊行はかなり遅い時期に属する。Fortunio による最初のまとまった俗語文法書 *Regole grammaticali della volgar lingua* (1516) が世に出てから既に十年近くが経過していた。ベンボもこの書の存在は強く意識しており、Fortunio にはるかに先行する形で自著の執筆を進めていた旨、事あるごとに強く主張したことが知られている。『俗語論』の正確な執筆開始時期は不明ながら、実際のところ少なくとも著述の準備としての資料収集が 1501 年のアルドゥス版『カンツォニエーレ』の校訂作業に結び付いていたことは間違いないものと思われる。また、ベンボはこの著作の初版である Tacuino 版以後も、1538 年には第二版となる Marcolini 版を出版し、さらにその後も改訂を続けており、彼の没後、1549 年に出た決定版とされる Torrentino 版においても、無視できない改訂が行なわれている。従って、この著作には実に半世紀にわたる様々な段階が重層的に積み重なっていることになる。

このような事情がある以上、初版刊行の年、あるいは執筆開始時期といったスタティックなデータには必ずしも大きな意味はなく、むしろ重要なのは最終決定版の成立に至るまでの過程を検証することであると言えよう。しかも、時間的にこうしたプロセスとその一部が重なり合う形で進められたのが、アリオストによる『フリオーソ』の改訂作業であり、実際、1532 年の最終版（いわゆる C 版『フリオーソ』）には、明らかにベンボの『俗語論』からの影響と認められる改変の跡を見ることができる。言うまでもなく、この段階でアリオストが読むことのできた『俗語論』は 1525 年の初版本のみであったと考えられるが、息子 Virginio の教育に関してベンボに尽力を依頼したアリオストであってみれば、個人的なつながりを含む様々なルートからベンボの言語思想に接する機会を持ち得たことは想像に難くない。『フリオーソ』は同時代のベスト・セラーのひとつであり、その言語が具体的・実際的レベルにおいてイタリア文学語の動向に大きな影響を及ぼしたことが確実であるだけに、この一事を以ってしても、文学史においてベンボの『俗語論』が果たした役割を実証的に跡づけるためには、その成立のプロセスをできるだけ詳細に把握しておく必要のあることが理解されよう。

３．研究の方法

本研究が目的とする、ベンボの言語理論の形成過程およびその各段階における《規範》の具体像の追跡のためには、『俗語論』の三つのエディションに加えて、初版以前の段階を示す手稿 Vaticano Latino 3210 や、さらには、彼の《規範》思想の出発点とも目される 1501 年のアルドゥス版『カンツォニエーレ』の校訂作業にまでメスを入れることが必要である。

まず、アルドゥス版『カンツォニエーレ』のテキストについては、これがベンボの作成した Vaticano Latino 3197 に基くものであることはもとより明らかであるが、これとペトラルカの自筆写本 Vaticano Latino 3195 との間に存在する無視しえぬ相違がかねてより議論の的となっていた。すなわち、この相違がベンボの意図的なものなのか否か、という問題である。アルドゥス版はそのテキストがペトラルカの自筆写本に基くものである旨、奥付ならびに後書きに主張されており、そこに言う自筆写本とはとりもなおさず Vaticano Latino 3195 であるはずで、もしそうした言明が正しいとすれば、件の相違はベンボが意図的に導入したものということになる。

しかしながら、近年、Giarin, *Petrarca e Bembo: l'edizione aldina del《Canzoniere》*, in Studi di Filologia Italiana, vol.62 (2004) が綿密な文献学的分析により校訂作業の詳細を明らかにすることに成功し、Vaticano Latino 3197 の依拠したのが Vaticano Latino 3195 とは別の写本であったことを論証した。そして、これに伴って生じる、ベンボと彼が後に入手することになる自筆写本をすでに 1501 年段階で見ていたと推定される事実との不整合、およびアルドゥス版『カンツォニエーレ』の奥付の文言に含まれる問題点に関しては、拙論「ベンボとアルドゥス版『カンツォニエーレ』」（イタリア学会誌 56 号)で解決済みである。従って、問題の相違はベンボが意図的に導入したものではなかったこと、すなわちこの校訂作業には《規範》がまったく適用されていなかったことが明らかとなった。

ただし、この事実をもって 1501 年段階で《規範》意識そのものが未だ存在していなかったと考えるわけにはいかない。この点に関してはアルドゥス版の一部に、研究者の間で Fascicolo B と通称される一文が付加されており、これがテキストに関して持ち上がった疑惑に答える形で、校訂が正しく行なわれている旨、改めて主張する文書であることから、その分析を通じて、この時点における《規範》意識の有無、そしてそれが存在した場合にはそのあり方を知ることができる。ちなみに、「アルド（アルドゥス・マヌティウス）より読者諸氏へ」なるタイトルを持つこの文書が実質的にベンボの手になるものであることはかねてより確実視されている。

これ以後、ベンボはそのウルビーノ時代 (1506-1512)に『俗語論』の執筆に取り掛かっており、恐らくは第一巻および第二巻の内容が基本的にこの時期にまで遡るものと考えられるが、残念ながら直接その段階のテキストに迫るための資料は存在しない。現存する手稿は初版刊行の直前に位置すると推定される Vaticano Latino 3210 のみである。しかしながら、これに先立つローマ時代 (1513-1521)は教皇秘書としての仕事が多忙を極め、また聖職録の蓄積による蓄財にも余念がなかったことなどから、『俗語論』の著述はさほど進展しなかったと考えられており、また、本研究にとって特に重要度の高い第三巻はいずれにせよ 1520 年代に入ってから執筆された可能性が高い。従って、『俗語論』の執筆過程にはおよそ十年間のブランクが実際にあったものと見なして差し支えない。

Vaticano Latino 3210 に関しては、初版の校訂版にこの手稿のテキストを併記した *Prose della volgar lingua, L'editio princeps del 1525 riscontrata con l'autografo Vaticano latino 3210*, Bologna, 2001 が Claudio Vela によって刊行されており、また手稿の初期段階を復原する試みとしては Mirko Tavosanis による *La prima stesura delle Prose del volgar lingua: fonti e correzioni*, Pisa, 2002 がある。しかし、この種の手稿を活字化したものが一般にそうであるように、余白への書き込みや訂正の跡までを盛り込もうとすると、どのように工夫を凝らして処理しようとも表記は非常に分かりにくいものにならざるを得ない。すなわち、理論的には Vela の校訂版を見ることによって一応 Vaticano Latino 3210 の構造が再現できるはずではあるが、実感を持ってそれを把握することは不可能である。従って、これらのエディションをいわば検証の道具として活用しつつも、実際には手稿の写真そのものを読み解いて確認していくことになる。

また、改めて言うまでもなく Vela による校訂版は飽くまでも 1525 年の初版（Tacuino 版)に至るまでの情報しか備えていない。一方、本研究遂行のためには 38 年（Marcolini 版）および 49 年（Torrentino 版）の各エディションにおける加筆・訂正個所も問題になる。これらのすべてを同時に、かつ一目で区別が付くよう表わす工夫が必要となる。幸いパソコン（マイクロソフト社のワード等のソフト）の使用によりフォントを色分けすれば

かなり理想に近い資料を整備することができる。これは例えば共観福音書などにも用いられている手法で、少なくとも黒インク一色のみの通常の校訂版とは比較にならない。

さらに、こうして整えられたテキストからはベンボの没後にヴァルキの手によって出版された Torrentino 版における訂正個所のうち、著者の指示に依らない修正と推定される部分を識別することが比較的容易になる。そのためには一見したところ単純な誤植と見えるエラーや、綴字法上の違いに過ぎないものも逐一チェックするのが望ましい。そこにどのような情報が含まれているか予測がつかないからである。一度失われた情報は二度と戻らない以上、研究のベースとなる資料の整備に当たっては無駄となる可能性の高い異同も拾い上げておくことが必要であった。

具体的には、まずベースとなる資料の入手とその整備が最重要課題となる。『俗語論』の三つのエディションならびに Vaticano Latino 3210 の写真を取り寄せ、これをデジタル映像化して Debenedetti の区分に沿ってレイヤー処理で章番号を付し、これを元にテキストを文字情報化するわけである。テキスト相互の異同については、フォントに適切な色分けを施すことによって一目で区別が付くようにする。

なお、刊行された三つのエディションについては明解な形での色分けが可能であるが、手稿に関しては、執筆当初の本文（いわゆる prima stesura）とその後の訂正あるいは余白への書き込み部分との色分けが必要で、こちらは個々の修正箇所によって条件が異なるため、完全な表示は不可能である。そこで、無理をして却って識別しにくくなる事態を回避すべく、当初の叙述とこれに対する変更という二種類の区分のみに留めた。手稿に関してはいずれにせよオリジナル（写真）を参照する必要があり、従って文字情報化テキストには、基本的に何らかの問題を含む可能性の高い箇所であることを示す以上の機能はあえて担わせないようにしたのである。

また、テキストのこうした文字情報化作業は『俗語論』全編に関して行なわれるべきであるが、本研究においてはとりあえず第三巻に関して優先的に行なった。

４．研究成果

「研究方法」の記述から明らかなように、重要な成果は整備された研究資料である。『俗語論』の手稿および三つのエディション、すなわち Vaticano Latino 3210、Tacuino 版、Marcolini 版、そして Torrenntino 版のデジタル写真そのものは言うまでもないとして、第三巻に関してはこれらを合わせたテキストを文字情報化した。フォントのカラーは、基本的に Vaticano Latino 3210 の当初の記述をベースの黒文字とし、これ以後の異同を４色で識別可能にした。一旦書かれた手稿に後から余白等を利用して書き加えられた部分を緑、手稿にはまったく見当たらないものの初版(Tacuino 版)にはある部分を青、その後 Marcolini 版で付加された部分が紫、そして Torrentino 版で書き加えられた部分が赤という色分けである。また、ペトラルカ、ボッカッチョ等の古典的俗語作品からの引用に関しては主として Debenedetti 版の注に基き青緑色でその出典を補った。

ただし、このテキストを作成する過程において痛感されたのは、こうした資料を利用するに当たって当然問題となる叙述内容の理解の難しさである。Fortunio の書を除けばそれ以前の俗語文法書は皆無だったし、ベンボは立場上、Fortunio の著書を認めていない。少なくとも自著の方が時間的に先に書かれたとする主張を貫いている。このため、品詞の名称から動詞活用の法・時制の呼称等も、ラテン語からの流用が可能なものを除けば基本的に一から作られる必要があったわけで、人称代名詞にせよ形容詞にせよ、およそあらゆる叙述はそれ以前には無い新たな表現によって行なわれており、言うまでもなく現代の整備された文法書で用いられる表現とは大幅に異なっている。また、そもそも対象となるのが実用言語ではなく文学語、とりわけ抒情詩が中心であることから、作品の持つ意味内容を超えた部分での議論が重要なわけで、ベンボの言わんとするところを正確に理解するのは容易でない。作業の過程において、苦労の末に突きとめた文意を整理して叙述し直す必要のあることが明白となった。方法としては詳細な注によって説明することも可能ではあったが、ここではそれよりも本文を日本語に翻訳するという方法を選択した。注はもちろん必要ながら、内容の正確な理解が目的であるから逐語訳である必要は毛頭なく、本研究の目的である各エディションの異同の追求も、和訳文にフォントの色分けを施すことにより一層容易となる。

こうして完成した和訳は、言うまでもなくベンボ自身の叙述部分のみであり、引用されたペトラルカ、ボッカッチョ等の作品には及んでいないし、論述のテーマとなっている品詞等も同様である。原語を解さない読者を対象とした通常の翻訳とはまったく異なり、イタリア古典文学の研究者にとってしか意味を持たない特殊な翻訳である。飽くまでもこの種の専門研究を遂行するためのツールであるから、公刊等はもとより考えていない。

和訳したのはとりあえず第三巻のみであるが、研究用資料としてのその効果には目覚

ましいものがあり、錯綜したベンボの叙述が明快に理解できるようになった。未だその意図するところが完全に掴めていない部分が残されてはいるものの、理解の精度は飛躍的に向上した。しかし、その結果確認されたのは、手稿の段階から Torrentino 版に至るまでの間、連続してその変化を観察できる部分はそれほど多くなく、中でも《規範》確立のプロセスに明瞭かつ直接的な関わりを持つ箇所は、残念ながら研究開始前から把握していた《前置詞 in＋定冠詞》をめぐる第三巻 58 章にほぼ限られること、そしてこの箇所の変化の様子が、《規範》へのこだわりが時間とともに直線的に強まっていくということであった。

すなわち、《規範》の具体的なあり方そのものは 25 年の『俗語論』初版において実質的に確立されており、それ以後のエディションにおいては、他者との論争においてこそペトラルカの権威を利用するものの、ベンボの姿勢に文献学的関心は認められない。もっぱらイタリア文学語の厳格な定式化に努力が集中されており、こうした目的のためには遂にペトラルカ自身の作品を改竄することも辞さなくなるわけであるが、こうした推移がリニアであり、その方向性が極めて安定していたことが改めて明らかとなった。

また、1501 年のアルドゥス版『カンツォニエーレ』の校訂作業においては顕著であったベンボの文献学者としての姿勢が、《規範》の制定者としてのそれに転じる、いわば転回点に関しては、他ならぬアルドゥス版『カンツォニエーレ』そのものに付された後書き Fascicolo B の記述を詳細に分析することにより、それがまさにこの時点、すなわち同書出版の時点であった可能性の高いことが確認された。これは本研究の成果として大きな比重を占める資料整備によって浮かび上がった事実を検討して得られた結論であるが、そうした事実の一例として、件の文書が重要視して論じている se non se というトスカナ語の表現に関する論述およびその表記を挙げることができる。そもそもペトラルカ作品 (Rvf. XXII, 2) に登場するこの表現の表記法には、se non, senonse, se non se 等々、強い揺れが見られ、語間スペースの取り方までを視野に入れたベンボの選択の時間的推移を追跡すると、Vaticano Latino 3217（アルドゥス版のための校訂作業）に残された“文献学者ベンボ”の逡巡ぶりに始まり、これに続く Fascicolo B の文中、さらに『俗語論』第三巻 73 章における Vaticano Latino 3210（『俗語論』草稿）から最後のエディションに至る間の変化を観察することが可能になる。それにより、1501 年の段階でペトラルカの自筆写本を目にしていたであろう彼が、Fascicolo B をしたためるに際してすでに恐らくは意図的に《規範》を優先させ、その後はより明確な意思を持ってその方向に突き進んだ様子を観察することができるのである。

上に述べた例にとどまらず、本研究において整備された『俗語論』原文テキストおよび和訳が、続く段階の研究にとって有益であることは言うを待たない。アリオストをはじめとするルネサンス期の実作品による《規範》の受容があって初めて確立されることになるイタリア文学語の実相追求への道を開くに当たり、これらは不可欠なベース資料である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔図書〕（計 1 件）
<u>天野惠</u>、鈴木信吾、森田学『イタリアの詩歌』（三修社、2010 年 10 月）

６．研究組織
(1)研究代表者
天野　惠（AMANO KEI）
京都大学・文学研究科・教授
研究者番号： 22520306